

# 実物に触れた感覚を言葉に



高校入学当初、女子2割の少なさに「大変なところに来たと思った」と本田桂子さん

世界銀行グループの一つ、多数国間投資保証機関(MIGA)の長官を務める本田桂子さん(55、1980年卒)は、米国・ワシントンを拠点に世界を飛び回る日々を送る。途上国への民間投資を増やすため、政府の契約不履行といった政治リスクから生じた損失に対する保険を提供している。

ピアノや合唱に小さいころから親しみ、中学生のころは「字より楽譜を読んでいる時間が長かったかも」。高校でも女声コーラス部に所属。大学で音楽を専攻しようと、ピアノと声楽のレッスンにも通ったが、高3の夏休みに自分の音楽の実力を冷静に評価し、「二十分」と判断。お茶の水女子大学に進学してマーケティングを学んだ。

大学4年のときにコンサルティング会社のマツ

キンゼー・アンド・カンパニーでインターンを経験。コンサルティングの仕事を知り、「知的好奇心を駆り立てられた」。卒業後はコンサルティング会社と投資銀行、米国の経営学大学院を経て、マツキンゼーに入社。同社日本支社では、アジア部門で女性初のシニアパートナーを務めた。

ヘッドハンティングの会社に声をかけられ、2013年からMIGAへ。当時高校生だった娘が「そういう仕事を自分もやってみたいし、お母さんにもやってほしい」と背中を押しした。貧困の撲滅と繁栄の共有は世界的な課題。その解決のため働けるのが魅力です。

俳人の正木ゆう子さん(64、71年卒)は、高校時代をのびのびと過ごした。勉強はよくできたが、授業中はぼーっと外を見ていることが少なくなかった。「眠っているでもなく、覚醒しているでもない。何もなくても時間が過ぎた」。女子生徒が

数学、特に幾何が好きだった。「俳人には理系が多いんです」と正木ゆう子さん

少なかったので、「女子が大切にされた。女子は3年間で誰かしらからラブレターをもらえた」。正木さんは? 「もらったと思いますよ」と笑う。熊本は俳句がさかんな土地柄。両親も俳句を趣味にしていた。お茶の水女子大学に進学後、3年生のころに兄に勧められて俳句を始めた。卒業後はデザイン会社に就職。あまりの忙しさに2年ほどで辞めて熊本に戻ったときも、家族で俳句の話ばかりしていた。

結婚を機に再び東京へ。専業主婦をしつつ、俳句を続けた。03年、句集『静かな水』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した。熊本の実家のすぐそばにある江津湖から題材を得て詠んだ句も含まれている。

「俳句には季語があるから、自然に対して敏感になる。とにかくよく観察するようになった」という。家を出たときに聞こえてきたコゲラの鳴き声、まぶしい朝日……。

「その感動を人に言いたくなる」。若い人たちにも伝えたい。「与えらるる情報ではなく、自分で実物に触れて、それがどんな感覚だったかを言葉にすることが大切です」(編集委員・根本理香)



数学、特に幾何が好きだった。「俳人には理系が多いんです」と正木ゆう子さん

次回は名古屋市の東海高校です。